
重甲ビーファイター一夏

蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

重甲ビーファイター一夏

【Zコード】

Z2315Z

【作者名】

蛇

【あらすじ】

虫と自然が好きなだけであとは運動ができるくらいの青年、織斑一夏は誘拐されたところを巨大なカブトムシに助けられた。そしてカブトムシから侵略者と戦つてほしいとお願いされる。

ビーファイターの〇〇を聞いてたら無性に書きたくなつた。後悔はしていない。敵は基本的にオリジナル。原作と違う展開あり。それでもいいというかたのみお読みください

プロローグ（前書き）

とつあえずプロローグから

プロローグ

外国にいけば日本じゃ見られない虫と出会える。そう思つてE.Sの世界大会で姉さんについていつたら変な奴らにさらわれた奴らの車の中で俺は後悔した。ちゃんと姉さんの言つことを守つていれば、こうやってさらわれずにするんだのに。そう思つていると突然車が止まつた。と、思つたら巨大なカブトムシに抱えられて空を飛んでいた

なにごとかと思い下を見れば奴らの車が炎をあげて燃えているカブトムシは混乱する俺を下に降ろすと人の姿になつた

「織斑一夏君だね。君に頼みがあるんだ」

「へ、え、え、頼み？」

「E.Sの世界に侵略者がやつてくる。侵略者の目的はこの地球の自然の破壊。その侵略者と戦つてほしいんだ」

「え、侵略者?...といつかなんで俺?」

「私が渡す力は虫を愛する心を持ち、なおかつなかなかの運動能力を持つ君にしか使いこなせない。お願ひだ、この世界を侵略者から守つてくれ」

カブトムシが頭をさげる。俺はこのときかなり混乱していた。さらわれたと思えばカブトムシに助けられ。そのカブトムシに世界を守ってくれと頼まれる。だけど、答えは決まつていた

「わかった。俺がやるよ」

「本当かい！」

了承したのは別に混乱しすぎて頭がおかしくなったとかではなく、世界を侵略者から守るというのがカツコイイと思ったからだ。ただもちろんそれだけではない。自然を破壊する。その行為がゆるせない。なにより自然を破壊されたら虫たちと出会えなくなる。そう思つたからだ

「では、これを君に渡そう」

そういうてカブトムシはなにかを渡してきた。頭にカブトムシの角がついていて透明な羽の下に機械があるのがわかる

「それは我が一族の最新の技術を詰め込んだものだ。使い方は時期がきたとき、それが教えてくれる」

それだけいうとカブトムシは元のカブトムシの姿に戻り飛んでいつてしまつた

この時から俺、織斑一夏の物語が始まる。普通じやない物語が

「重甲！」

重甲ビーファイター一夏

今物語の幕が開く

第1話 誕生！ヒーローエイター（前書き）

お待たせしました。 第1話です

第1話 誕生－ビーファイター

「ここは次元の間。そこに一隻の海賊船が浮かんでいる
「キャプテン・ドーム。まもなく地球の存在する次元に到着いたします」

『うむ、お前達。いよいよ我らマドウー海賊団が地球を征服すると
きがきた。みんなもの、準備はいいな?』

「……オ――――!――!」

「ですがドーム様。地球にはこつくりビータム一族が住み着いたと
いう情報がありますが」

『ふん、ビータム一族などもう敵ではないわーそれよりマドラス。
合成獣はできてるか?』

「ああ、できとるよ。で、こいつを地球に送り込みやあいいんだね
?」

『その通りだ。早速送り込め!』

「はいよ。というわけだ。いきな、合成獣力ノノギリ

「クキヤキヤ!」

直立している力ノ。ハサミがノノギリになっている力ノノギリは
意気揚々と地球へとむかった

地球

「やばっ！もうこんな時間だ！」

織斑一夏はパンを牛乳で流し込むと鞄を掴み慌ただしく家を飛び出した

「ああ、くそ。もつと早く起きてれば」

ブツブツと愚痴を呟きながら駅に向かって走る一夏。なぜ彼がここまで急いでいるのか、答えは簡単。高校の入試に遅れそうなのである。彼が受けようとしてるのは藍越学園。私立でありながら格段に安い学費と卒業後の進路もケアしてくれるということで受験を決めた高校である。しかし昨年におきたカンニング事件により試験会場を入試の一日前に通知するというはた迷惑な政府の御達示があり、その試験会場が思つたより遠かつたのである。事前に準備はしていたがそれも寝坊による焦りによつて消え、今ただひたすら走っているのである

電車に乗り試験会場行きのバスに乗り換える。そのとき一夏はバスの中に一人、見覚えのある女性がいるのに気づく。その女性の座る席に近づく一夏

「第？第？…だよな？」

女性は一夏のほうに顔を向けるととたんに驚いた表情になる

「い、一夏！？なぜ、ここに…？」

「試験会場にむかうためだよ。それにしても久しぶりだな。隣、いいか？」

「あ、ああ。別に構わんぞ」

簞の隣に座る一夏

「そ、それにしてもよく私だとわかつたな
顔を赤くしながら言つ簞

「ん？そりやあ幼なじみだし顔を忘れるわけないだろ？」

「・・・・・」

赤かった顔は元に戻り。少し暗くなる簞

「そういえば剣道の全国大会で優勝したんだってな。新聞で見たぜ」「そんな簞の様子に気づくこともなく、たわいのない話を続ける一夏。そのときバスが大きく揺れ一夏と簞はガラスを突き破り外にほうりだされる

「うう・・・・うう。簞、大丈夫か？」

「な、なんとかな。それより何がおこったんだ？」

二人がバスのほうを見るとバスは横倒しになり上にカニの化け物が乗っている。合成獣力二ノコギリだ

「な、なんだあいつ！？」

「ケーケツケツ！む？助かったのがいたか。いいだろ？このカニ

ノ「ギリ様がじきじきに殺してくれるわ！クエー！」
そつ言うとカーノ「ギリは腕のノゴギリを振りかざし襲い掛かつて
きた

「うわあ！」

咄嗟に近くにあった鉄パイプでカーノ「ギリのノゴギリを受け止める一夏

「クエー！抵抗するか地球人！ならば、現れよシタッパー！」
どこからともなく現れる様々な色のバンダナをつけた、いかにも下
つ端ですといった感じの怪人達

「くそっ！なんだよ」「ひー..」

筹も鉄パイプを手にとり構えるがあきらかに数が違う
一夏達に襲い掛かるシタッパー。そのとき！巨大なカブトムシが飛
んできてシタッパー達を吹き飛ばした！

「あの時のカブトムシ！そうだ、そういうえば・・・」

服のポケットから以前カブトムシに渡された謎のツールを取り出す
一夏

「そうだ織斑一夏！重甲と叫び、そのビークマンダーを天へとかざ
せ！」

人の姿になりシタッパーと戦いながら叫ぶカブトムシ

「よし、重甲！」

一夏はビークマンダーを右手に持ち腕をXの形にクロスさせ重甲と
叫ぶ。するとビークマンダーの閉じていた羽が開く

「ハツ！」

それを天へとかかげる。するとビーロマンダーから光の粒子が出て一夏の体を包んでいく。光が消えたときそこに立っていたのはカブトムシの角を生やした全身を青いアーマーで包んだ戦士だった

「これは……」

「い、一夏なのか?」

一部始終を見ていた篝はかなり驚いていた

「それこそが君の力!ビーファイターのブルービートだ!」

「ブルービート……」

変身の余韻にひたる一夏

「ええい、なにをしているシタッパー共!とつととやつらを殺せ!」

しごれをきらしたカニノコギリがシタッパー達に命令をする

命令によりブルービートにむけてレーザー銃を乱射するシタッパー達

「うおおおお!…………ってあれ?効いてない?」

レーザー光線をくらうもブルービートの体には傷一つない

「よつしや、これなら!うおおおお!」

シタッパーに突っ込んでいくブルービート。攻撃をしかけてくるシタッパー達をパンチやキックで倒していく

「はあつーでやつーとつやあー」

「ムムムム、クエー!」

シタッパーをすべて倒すと今度はカニノコギリが襲い掛かってくる。カニノコギリの攻撃をくらい吹き飛ぶブルービート

「いて、なにか武器はないのか？」

すると顔の内側のモニターにある武器の詳細が映し出される

「インプットマグナム……これが！」

腰のホルスターのインプットマグナムを抜き後方のレバーを引き1・
1・0とボタンをブッシュする

「はあっ！」

インプットマグナムからレーザーが放たれカーノゴギリを撃ち抜く

「ぐわあああ！」

マドゥー海賊団 海賊船

キャプテン・ドームが戦いの様子を見ている

『ちこつ、データム共め、邪魔をしあつて。いなつたら……』

キャプテン・ドームは「からか杖を取り出すとなにやら呪文を唱
え始めた

『キーンーンー！』

カニノコギリを追い詰めるブルービート。その時なんと空が割れ力ニノコギリとブルービートを吸い込んだ

「一夏ー?」「これはまずいね。アドゥーハリアだ」

「な、なんなんだ？そのマジウーハリアとは」

「マドゥー海賊団の船長キャプテン・デーモンが作り出す異空間の力。マドゥーヒーラの中ならマドゥー海賊団のやつらに負けない力は発揮できない100%の力を発揮することができる」

「で、でせわしだめでは100%ではなかつたといつのか?」

「…………残念ながらね」

「一夏」

ブルービートは荒れ果てた荒野に立っていた

「うーん、どうだ？」

「クヨーケツケツ！ ここはマドゥーハリアさん様を倒さないかぎり、ここからは出られないぜえ！」

「はんーなら簡単じゃねえか」

「言つてろ小僧！ クヨー！」

ブルービートに飛び掛かるカニノゴギリ

「うーん、うわっ！」

カニノゴギリに投げ飛ばされるブルービート

「くらええええ！」

カニノゴギリの口からビームが放たれブルービートに直撃する

「うわああああ！」

吹き飛ばされ地面に倒れるブルービート

「クヨーケツケツ！ ここまで威勢はどうした？ 小僧？」

「へへ、うう……」

「クヨーケツケツ！貴様にごどめをさしたらもう邪魔するものはない！地球を破壊しつくしてくれるわー！クヨーケツケツ！クヨーケツケツケツケツ！」

倒れているブルービートを見ながら高笑いを続けるカニノコギリ

「…………ぞけんな」

「クエ？」

「ふぞけんなよカニ野郎」

ふらふらと立ち上がるブルービート

「クヨーケツケツ！まだやる気か小僧」

「てめえらなんかに、地球を、好きにさせるとか！」

ブルービートのモーターにある武器の詳細が映し出される

「スティングガーウェポン！」

背中に右手を廻すブルービート。すると先が剣になっている変わった武器が握られる

「スティングガーブレード！」

スティングガーブレードをにぎりしめ、ブルービートはカニノコギリにむかっていく

「はあつー！」

「なんのー！」

カニノコギリはスティングガーブレードによる斬撃をノコギリで受け止める。が、ブルービートはそのノコギリ「とカニノコギリを斬つ

てしまつ

「ぐわあああ！俺様のノコギリがああ！」

ブルービートはステインガーブレードを上段に構える。するとステインガーブレードの背部がスライドしファンが露出する。そしてそのファンの回転とともにステインガーブレードの剣の部分が回転を始める

「ビートルブレイク！」

回転するステインガーブレードでカーノコギリを縦に斬る

「ぎゃああああああ！」

カーノコギリは悲鳴をあげるとそのまま爆発した

「空が！」

空が再び割れそこからブルービートが飛び出してくる

「一夏！」

ブルービートは変身を解除し一夏の姿に戻る。そんな一夏に駆け寄る第

「凄いよ。期待していた以上だ織斑一夏」

かなり感心したよつすで一夏に近づくカブトムシ

「へへへ。つて今何時だ！？」

慌てて腕時計を見る一夏

「やばい…」れじやあ間に合わない…」

「なら、僕が送つてあげよう。せめてものお礼だ」
カブトムシは人の姿からカブトムシの姿に戻ると一夏と簞を抱え上げ飛び立つた

「おおー、これなら間に合ひ。サンキュー・カブトムシ」

「そういえば言つてなかつたね。僕の名前はパルプ。カブトムシじゃないよ」

「そつなのか。じゃあサンキュー・パルプ」
マドゥー・海賊団の合成獣、カニノ「ギリをしりのぞけた織斑一夏。
しかしそまだ戦いは始まつたばかりである。戦え織斑一夏！ 戦えビー
ファイター！ 地球に平和を取り戻すその日まで！

なおこの後試験会場についた一夏がその複雑な内装から迷い間違つてIIS学園の試験場に入りIISを起動させてしまうのは余談である

第1話 誕生ー・ビーファイター（後書き）

作者がビーファイター見たのが結構前なのでつい覚えないとこが
あります。ご了承ください

第2話 織斑一夏抹殺命令！？登場、一人目のヒーファイター（前書き）

2話です。二人目の登場です

第2話 織斑一夏抹殺命令！？登場、一人目のヒーローアイター

次元の間 マドゥー 海賊船

キャプテン・ドームの前のモニターには一夏の姿が映し出されている

『この男が我々の邪魔をしているのだな？』

「そうさね。しかもビータム一族が絡んでるときたものだ」
キャプテン・ドームの間にマドラスはなんともめんべくわざり
答えた

『……邪魔だな。マドラス…』

「あいあい。合成獣の準備はできどるよ。いつてきなバクダンアゲ
ハ

「フオー！」

アゲハ蝶とバクダンの合成獣、バクダンアゲハはひとなきすると地
球へとむかつた

「（なんだこの状況）」

織斑一夏は現在の状況を嘆いていた

現在このクラスには男は一夏しかいない。当然だ。例外でもなければISは女性にしか動かせないのだから

その例外になってしまったのが一夏だ。試験場を間違えISを動かしてしまったのだから。それゆえに貴重な存在としてIS学園にほうり込まれ、今、女子達の好奇の視線を受けている。まあ、視線を集めている理由はそれだけではないのだが

「これならマドゥー海賊団と戦つほうが数倍楽だ」

ぽつりと呟く一夏

あの後、何度かマドゥー海賊団と戦ってきた。今のところは一人でなんとか勝ててはいるが。最近はさすがに辛いものがある

「（仲間がいればな）」

一緒に戦ってくれる仲間がいれば。切実にそう思つ一夏
ふと簫の座る席に目をやる。簫とはカーノコギリとの戦いのあとも
ちよくちよく会つている。一夏に力を与えたパルプを除けばブルー
ビート＝織斑一夏だとゆういつ知つてゐる人間だからだ。もちろん
理由はそれだけではないが簫のためにもここでは割愛させていただく
視線に気づいたのか簫がこちらに目をむけるがすぐに逸らしてしま
う。気のせいか、その顔はほんのり赤く染まっていた

その時教室に一人の女性が入ってきた。緑髪で眼鏡をかけた可愛い
らしい女性だ

「皆さん初めまして。このクラスの副担任をつとめます山田真耶といいます。皆さん一年間よろしくお願ひしますね」

山田真耶と名乗った女性はニッコリと微笑むとクラスを見渡す。そして一夏を見て視線が止まる

「え、えっと。織斑一夏くんですよね？」

なにやら慌てた様子で一夏に聞いてくる真耶

「はい、そうですけど」

「そ、その頭の上のカブトムシは……」

そう。一夏の頭の上にカブトムシが乗っていたのだ

「こいつですか？こいつはパルプってこります」

一夏の頭の上に乗っているカブトムシの正体。それは一夏に力を与えたパルプだつた。パルプはカニノコギリとの戦いの後、一夏を見守るためサイズを日本のカブトムシサイズに変え、こいつして一夏の頭の上に乗つて生活を共にしているのである

「い、いえ、名前を聞いているのではなくてですね？その一、なんでカブトムシを頭に乗つけているのですか？」

「ダメですか？こんなに可愛いのに」

そういうながらパルプを人差し指でなでる一夏

「あ、いえダメというわけではなくてですね？といつか可愛いんですけど？」

その言葉を聞いたとたんバン！と机を叩き立ち上がる一夏

「なに言つてるんですかー虫はものすごく可愛いんですね…そもそも虫というのはですね」

また始まった。と、うんざりした顔になる筈。一夏に虫の話題を振るとそれだけで2時間は喋り通すので友人の間ではNGとされている。現に筈も小学生のころ、虫嫌いだった自分をそこそこ好きにさ

せるほど虫の良さを話されたことがある
まあそこもカツコイイのだがと思つ筈

「だから虫といふのはですね」

まだ喋り続ける一夏。その後ろに一人の女性が忍び寄る。危機を察知したパルプが頭を離れた直後、一夏の頭に出席簿が振り下ろされる

「いだあ！」

机に突つ伏し痛みに悶える一夏

「まつたく、お前は教師を洗脳する気か？」

痛みに悶える一夏を見下ろしながら女性はため息をはく

「いたたつ、つて千冬姉！？いだつ！」

再び振り下ろされる出席簿

「織斑先生だ」そう言い放ったのは一夏の姉、織物千冬である

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

「あ、それが生徒の自己紹介がまだでして」

「む、大方こいつのせいだら」

そう言いながらバンバンと出席簿で一夏の頭を叩く

「まあいい。先に私が自己紹介しよう」

そう言い教壇の脇に立つ千冬

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15才を16才までに鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

千冬の自己紹介が終わるとクラスが黄色い声援で包まれた

「キヤー——！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんですー北九州からー」

「あの千冬様にっこ指導いたげるなんて嬉しいですー！」

「私、お姉様のためなら死ねますー！」

キヤーキヤーと騒ぐ女子達をうつとうしそうな顔で見る千冬

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

その言葉にそりこ騒ぎだす女子達

「あやあああああーお姉様！もつと叱つてー罵つてー！」

「でも時には優しくしてー！」

「そしてつけあがらないようこそ縫をしてー！」

そんな状況を尻目に一夏に話しかける千冬

「で、お前はまた虫のことで熱くなつて大事なSHRの時間を潰したのか？」

「いや、つい癖で。ところがなんで千冬姉がここにいただあー。また叩かれる一夏

「織斑先生と呼べ」

このやりとりに周りがまた騒がしくなる

「え？ 織斑君つて千冬様の弟？」

「それじゃあ、世界でゆづりつ駄でエレガ使えるつていうのも、それが関係して？」

「いいなあつ。代わつてほしいなあつ」

それを気にする」となく千冬は真耶に指示をだす

「山田先生。早く自己紹介を」

「あ、はい。では、出席番号順に自己紹介をしていくください」

「時間がないから早くしろ。まずは出席番号1番」

このあと、なんとか時間内に全員の自己紹介を終える。ちなみに一夏は虫の巣を語りうとして。また叩かれていた

特になに」とまなく一時間目が終わり、一夏は机に突っ伏していた一時間目の内容はIS基礎理論。男であり興味の対象が虫に向いていた一夏にとつてはまったくわからない内容である。突っ伏している理由はそれだけではない。周りと視線を合わせないためだ。教室も廊下も女子だらけ。その全員が一夏に視線をむけている。一夏は世界でゆういつISを動かすことができる男。そのニュースは世界中で報道された。それゆえにこのIS学園の女子達にとって興味の対象なのだ

一夏と話がしたい。話しかけるのは恥ずかしいし話しかけてくれないかと見つめる教室の女子

動物園のパンダを見る感覚で一夏を見る廊下の女子

そんな状況は一時間目が始まる直前まで続いた

二時間目

「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ」

すらすらと教科書をよんديいく真耶。一方一夏はまったくついて行

けなかつた

「（なにを言つてのかわつぱりわからん）」

一応教科書を開いて真耶の読んでいるであれつ部分を見てみるがなにが書いているのかわつぱりわからない

「（Jのまめじゅせゅ）」

やつ黙つた一夏は手を挙げる

「どうしました織斑くん。なにかわからなことJでもありましたか？」

「はい。全部わかりません

なぜか誇りしげに面倒見る一夏

「せ、全部ですか？」

「はい、全部です」

その言葉に教室の隅で控えていた千冬が近づいてきた

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

なんと答えたらいいかわからない一夏。実は参考書はマジウー海賊団の伝成獣と戦つていたときに敵の炎が当たつてしまつたのだ

「・・・・・・燃やされました」

とつあえず伝成獣の」とほ隠し話してみる一夏。次の瞬間には叩かれていた

「嘘をつくならもうとまつな嘘をつけ。あとで再発行してやるから

一週間以内に覚える。ここの

「いや、あの厚さで一週間はきつこ」

「いいな」

「・・・・・・はい」

千冬の放つオーラに負けた一夏は素直にこいつことを聞くのだった

「ちよっと、ようじくって?」

「ん?」

一時間目の休み時間。一人の女性が話しつけてきた

「えーと、ケシズミ・オットセイさんだつけ?」

「セシリ亞・オルコットですわー馬鹿にしてますのー?」

「バン!と一夏の机を叩くセシリ亞

「いや人の名前覚えるのが苦手で。といひでオルコット」「なんですの?」

「お前、キバラヘリカメムシみたいな匂いがするな」

キバラヘリカメムシ

腹部が黄色いヘリカメムシ科の仲間。人によつて意見が違うが作者的には柑橘系の匂いがした。よつするにいい匂いのするカメムシである

「・・・・・」

顔を真っ赤にしプルプルと震えるセシリ亞。それを見ていた篠は一夏に近づく

「一夏。人を虫に例えて褒めるのはやめると前に言つただろ」「褒めてたの！？」と驚愕する周りの女子

付き合いの長い篠はキバラヘリカメムシがどういう虫かわかるため、セシリ亞のことをいい匂いがすると褒めたのがわかつたがセシリ亞はそうもいかない。カメムシ＝臭いというイメージがあるため、自分が罵倒されたと思つてしまつたのだ

「だつてほんとにキバラヘリカメムシみたいな匂いがするんだぜ？」

「たしかに同じような匂いだが違うだろ。キバラヘリカメムシのほうがいい匂いだぞ」

「そりか？うーん。たしかにキバラヘリカメムシより弱いかな？」
どうやら篠は完全に一夏に毒されているようだ。虫のことを知らない他人からしたら罵倒されているようにしか聞こえない会話を続ける二人。現にセシリ亞は爆発寸前である

「・・・・・あなた達、いい度胸してますわねえ」

いつのまにか篠も対象になつたようだ

「しまつたな。完全に怒らせてしまつたぞ」

「ん? なんで怒つてたんだ? カルシウム足りないのか? ならいいのをやひつとカバンを探りタッパーを取り出す

「ひいっ!」

タッパーの中には虫がたつぱり詰まっていた

「な、なんですのそれ!」

「なにつて、イナゴの佃煮だよ
うまいぞ? と一つつまみ食べる

「一夏、いきなりそれはさきつこと思ひつい。それ以前にはやくあやまつたほうがいい」

「え?」

そこで一夏は完全に一いちらを軽蔑した目でみるセシリ亞を見る

「もしかして、俺またやつちやつた?」

「ああ」

一夏は虫以外のことにはあまり興味がわかない性格ゆえ、いきすきて周りを引かせることがなんだかあった。そのたびに幼なじみや友人に止められていたのである。虫さえ除けば普通なのだが。・・・・・いや、絶対除けないが

と、そこでチャイムが鳴った。なんとも微妙なタイミングである

「へへ、おぼえてなさい!」

悪役の捨て台詞みたいな台詞をいつて自分の席に戻るセシリ亞
同じく席に戻った篠が座つたところでタイミングよく千冬と真耶が
入ってきた

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特製について説明
する」

一時間目一時間目と違い千冬が教壇にたつたころから重要な授業で
あることがわかる

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決め
ないといけないな」

ふと、思い出したように言つ千冬

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会
の開く会議や委員会への出席。まあ、クラス長だな。ちなみにクラ
ス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今
の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一
年間変更はないからそのつもりで」

一夏はとくに興味ないのかパルプを撫でている

「はいっ。織斑くんを推薦します」
えつ？と撫でる指を止める一夏

「私もそれが良いと思います」

「では候補者は織斑一夏。他にはいか?自薦他薦は問わないぞ」

「え、ちょっと、俺！？」

おもわず立ち上がる一夏

「「つるやこ」や織斑、席につけ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ええっ！俺そんなのやったくな」「自薦他薦は問わないと言つた。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」で、でもさあ

反論を続けよつとした一夏を甲高い声が遮る

「待つてくださいー納得がいきませんわ！」

声の主は先程一夏にキバラヘリカメムシの匂いがすると言われた、セシリ亞・オルコットだ

「そのよつな選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリ亞・オルコットにそのよつな屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリ亞の勢いにしんとなる教室

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にはされでは困ります！わたくしはこのよつな島国までEIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！いいですか！？クラス代表は「ジージージー」「つるせえよオケラ野郎」な、なんですって！」

？

「鳴くなら地下で鳴け。地上じやお前のその甲高い声は迷惑だ」

今度は間違いなく罵倒をした一夏

「それともなんだ？その金髪ドリルで地面を掘るのが疲れたから地上で休んでるのか？ならその口も休めたほうがいいぜ。あんだけ甲高い声で喋れば疲れるだろうからな」

「―――! 決闘ですわ!」

「いいぜ、受け取るよ」

一夏が決闘を了承したその時、I.S学園に大きな爆発音が響いた

「な、なに?」

「事故?」

周りがざわめく中で一夏はパルプと思念通話をを行う。ちなみにこの思念通話は人前で自分が喋つたら目立つからとパルプから教えてもらつたものである

『パルプ。今の爆発音は・・・』

『事故などではないね。恐らくマドゥー海賊団だ』

『やつぱりか』

急いで教室を飛び出す一夏

「ちょっと一夏行くんですの!」

「(もしかしたら、あいつらなのか?)」

それを追いかけるセシリ亞と篝

「はあ。山田先生、私が追いかけるから君は教室で生徒達を見ていってくれ

「あ、はい!」

さらにそれを追いかける千冬

一方の一夏は

「たしかこっちのほうから聞こえてきたはず」
音の聞こえてきた方向へと必死に走っていた。そんな一夏にまづ篝
が追い付く

「篝！？ついて来たのか」

「一夏、さつきの爆発音は」

「ああ、たぶんあいつらだ」
その時、横の壁が爆発した。そのタイミングでセシリ亞と千冬も追
い付く。そして合成獣バクダンアゲハが現れた

「フオー、フオッフオッ。見つけたぞ織斑一夏！」

「な、なんだこいつは！」
現れたバクダンアゲハに驚く千冬

「パルプ！篝達を頼む！」

「まかせてくれ」

パルプは一夏の頭から降り人の姿になる。それに驚く千冬とセシリ
ア。一方の一夏はビー・コマンダーを取り出し構える

「重甲！」

ビー・コマンダーの羽を展開し上へと突き上げる

「ハツ！」

一夏の体がビー・コマンダーから出てきた光の粒子に包まれブルービ

ートへと姿を変える

「ブルービート！」

「フォーフォツフォツ、現れるシタッパー！」
どこからともなく現れるシタッパー達
シタッパーは各自武器を構えブルービートへと襲い掛かる

「はつ！たあつ！」

襲い掛かるシタッパーを軽くいなしていくブルービート。そのとき
突然ブルービートが爆発した

「ぐああああ！」

吹き飛ばされるブルービート。どうもブルービートが爆発したので
はなくブルービートの周りが爆発したようだ

「フォツフォツ、どうかな？私のバクダンの威力は」

「このつ！」

ブルービートは立ち上がるとインプットマグナムを抜きレバーを引
き1・1・0とボタンをブツシュする

「レーザーモード！」

しかし、撃とうとした瞬間にまた爆発がおきる

「ぐわあつ！」

また倒れる一夏

「フォーフォツフォツ、そろそろとどめだ」

倒れ伏す一夏に近づくバクダンアゲハ

「一夏ー！ puff、パルプ！ 私でビーロマンダーをくれー！」

「な、危険だ！ 君まで狙われる」となるべー。」

「覚悟はできている。私も一夏とともに戦う

「……………わかった」

そうこうしてパルプは懐から一夏のと違つタイプの一一本の触角のようなものがついたビーロマンダーを取り出し籌に渡す

「メスカブトムシの力を持つた戦士、レッドルへと重甲する」とのできるビーロマンダーだ。使い方は

「一夏のを見ていたからわかつていい。重甲ー」

籌はビーロマンダーを右手にもち腕をクロスさせ重甲と叫ぶ。する

とビーロマンダーの羽が展開、筹はそれを頭上へとかげる

「ハッ！」

籌の体をビーロマンダーからでた光の粒子が包んでいきブルービー

トより小さな角をもつた赤いアーマーの戦士、レッドルへと変身する

「はあー！」

レッドルは腰のインプットマグナムをぬき素早くレーザーモードへ

と切り替えバクダンアゲハを撃つ

「ぐわあー！」

バクダンアゲハは咲み後ろにさがる。レッドルはその隙にブルービー

ートに近づく

「大丈夫か一夏！？」

「その声、筈か！？その姿は・・・・・」

「パルプに頼んだんだ。さあ共に戦うぞ一夏！」

「・・・・・ああ！」

並び立つブルービートとレッドドル

マドゥー 海賊船

『ちいつ！邪魔物が増えたか。ならば・・・・・杖を取り出すドーム

『ムムムム、キエエエー！』

IS学園

突如空が割れバクダンアゲハとビーファイター達を吸い込む

「しまった！マドゥーハリアか！」
と、そこで千冬がパルプに近づく

「パルプだつたな」

千冬はパルプの肩をがっしりと掴む

「え？」

「貴様には聞きたいことがたくさんある。話してもらつぞ」
パルプは千冬を見て顔を青くする。千冬のまとうオーラがかなり怖
いものになっていた

マドゥーハリア

ブルービートとレッドルは荒野に放り出されていた

「へやつ、マドゥーハリアか」

「ここがマドウーエリア…………なにもない場所だな」

周りを見回すレッドル

「フォー、フォッフォッ！ もうきはよくもやつてくれたな！」

二人が空を見るとバクダンアゲハが飛んでいた

「これでもくらえ！」

バクダンアゲハが羽を大きく羽ばたかせると一人の周りが爆発する

「くつ！ またいきなり爆発が！」

「なにが爆発しているのかわからればいいのだが……」

「フォーフォッフォッ」

バクダンアゲハはまた羽を羽ばたかせる。そこでレッドルはあることに気づく

「あれは……ビートスキャン！」

レッドルは相手のことを調べるビートスキャンを行つ

再びおこる爆発

「くつ、やはり。なら！」

レッドルはインプットマグナムのレバーを引きঠ・ঠ・ঠとボタンを押す

「フォッフォッ。なにをするきかは知らんが。これで最後だ！」

また羽を羽ばたかせるバクダンアゲハ

「いけ！」

レッドルはバクダンアゲハにインプットマグナムをむけ引き金を引

く。するとさつときまでレーザーが放たれていた銃口から火炎放射が放たれる

「ギャアアアアア！」

火炎放射はバクダンアゲハにギリギリとどかなかつたがバクダンアゲハはなぜか爆発。燃えながら地上に落ちる

「な、なんだ！なにがおきたんだ！？」

「やつぱりな。やつは羽を羽ばたかせ粉をばらまき、粉塵爆発を引き起こしていたんだ」

レッドドルがバクダンアゲハをビースキヤンで調べたときバクダンアゲハの羽から粉がばらまかれ、さらにそこに火種を放り込んでいるのがわかつた

「だからやつが火種をほつり込む前に火炎放射で爆発してやつたんだ」

「おお！凄いな第！」

「そ、そうか？「貴様らあ、調子に乗るなよお」！」
炎の中、立ち上がるバクダンアゲハ

「しつこいやつだな。第…とごめをさすぞ！」

「ああ…」

「「ステインガーブレード！」

「ステインガーブレード！」

「ステインガープラズマー！」

各自の固有武器を構えるブルービートとレッドル

「フオ————！」

「はあっ！」突進してくるバクダンアゲハ。しかしレッドルのステインガープラズマーから放たれたネット状のビームが動きを止める
「ビートルブレイク！」

ステインガーブレードの背面がスライドしファンが回転。ブレード部分も回転している状態で必殺の一撃ビートルブレイクを動きの封じられたバクダンアゲハに決める

「ギヤアアアアアアア！」

バクダンアゲハは大きな悲鳴をあげ爆発した

空が割れ元いた場所に戻ってきたブルービートとレッドル。そこには険悪な雰囲気のパルプと千冬がいた
変身をといた一夏の姿を見つけた千冬は一夏に近づきに向つた

「一夏、戦うのをやめろ」

第2話 織斑一夏抹殺命令！？登場、一人目のヒーファイター（後書き）

粉塵爆発についてですが、ウイキペディアを見てこんな感じかなと使いました。いろいろ間違っている気がしますが怪物ということで大目みてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2315z/>

重甲ビーファイター一夏

2011年12月21日16時45分発行